

# 教室における向社会的責任目標と学習意欲、自尊感情との関連

須崎康臣\*・兄井 彰\*\*

Yasuo SUSAKI・Akira ANII

Relationship between norm awareness in class, motivation to learn and self-esteem

## ABSTRACT

本研究の目的は、教室におけるルールを遵守することや、他者への援助といった社会的責任目標が学習意欲を介して、自尊感情に影響を及ぼすといった関係を想定した仮説モデルを構築し、このモデルの妥当性について検討することであった。調査対象者は、小学生の4年生57名（男子25名、女子32名）、5年生66（男子30名、女子36名）、6年生57名（男子32名、女子25名）であり、中学生の1年生44名（男子23名、女子21名）、2年生56名（男子27名、女子29名）、3年生38名（男子17名、女子21名）であった。調査では、向社会的責任目標尺度（中谷, 1996）、学習意欲尺度（山下ほか, 1983）、自尊感情尺度（桜井, 2000）を用いた。社会的責任目標が学習意欲を介し、自尊感情に影響を及ぼすといった仮説モデルの検討には、共分散構造分析を用いた。分析の結果、想定した仮説モデルは適合度指標の基準を満たしており、仮説モデルの妥当性が確認された。また、各変数間の検討を行った結果、向社会的責任目標は学習意欲を規定していることが示された。また、学習意欲は自尊感情に有意な影響を及ぼすことが示された。このことから、教室における生活指導を通して、向社会的責任目標を育む重要性が示唆される。

【キーワード：規範意識、自己評価、教室場面、生活指導】

## 1. 緒言

自尊感情は、適応的な生活を送るうえで重要な要因の一つであると考えられる。伊藤<sup>1)</sup>は、自尊感情の高さが、心理的不適応と一貫した負の関係を有することを指摘している。そのため、子どもが適応的な生活を送るためにも、自尊感情を育むことが重要となる。自尊感情とは、「自己概念に含まれる情報の評価であり、自己についての感情」<sup>2)</sup>のことである。Shavelson et al.<sup>3)</sup>は、自己概念には多面的な構造を有しており、その一つに学業面があることを想定している。このように自尊感情を育むには、学習領域への働きかけが有効であり、そのためにも教員の学習指導が重要となる。つまり、教員は学習指導を通して、子どもの学習意欲を高め、学習達成の経験を積み重ねることによって、子どもの自尊感情が向上することが考えられる。

教員の学習指導の多くは、教室場面で行われる。教室場面はクラスメイトと協同で学習を行うといった社会的な側面を有している。そして、教室場面では、クラスメイトとの関係で学習が成立しているため、この関係によって学業達成が特徴づけられると指摘されている<sup>4)</sup>。そのため、教員は教室場面において子どもの学習指導だけではなく、クラスメイトとの関係や教室内のルールを守るといった生活指導も行うことが求められている。この点に関して、中谷<sup>4)</sup>は、「教育実践場面における教師の指導において、これまでとは異なるものとしてとらえられてきた、学習指導と生活指導という2つの指導が、相互に深い関わりをもっていること」を指摘している。つま

り、教員が行う学習指導と生活指導は、それらが独立して子どもの学習に影響を及ぼすのではなく、相互に関係することによって、子どもの学習が成立していることが考えられる。そのため、教員は、教室における生徒指導を通して、子どもの社会的な側面を育み、学習を促すことが重要になる。この教室における社会的な側面には、社会的責任目標が挙げられる。

社会的責任目標とは、中谷<sup>5)</sup>がWentzel<sup>6,7)</sup>に基づき定義した「教室における規範やルールを守り、対人的に円滑な関係をもとうとする目標」のことである。中谷<sup>5)</sup>は、社会的責任目標が社会的責任行動と教師からの受容を介して、教師評定の教科学習への関心・意欲と学業成績に正の影響を及ぼす過程と、社会的責任目標が教師からの受容を介して、児童評定の教科学習への関心・意欲と学業成績に正の影響を及ぼす過程が明らかにしている。また、中谷<sup>8)</sup>は、社会的責任目標が教室内の学習行動を介して、学業成績を促すことを示している。つまり、教室における規範やルールを遵守し、良好な対人関係をもとうとする社会的責任目標は、学習意欲を高め、学業成績を促進するといった肯定的な影響を有することが考えられる。したがって、社会的責任目標が学習意欲から自尊感情に至る過程を明らかにすることは教育的に意義あることである。

以上のことから本研究は、社会的責任目標が学習意欲を介して、自尊感情に影響を及ぼすといった関係を検討することを目的とする。そのために、この関係を示す仮説モデルを設定し、そのモデルの妥当性とモデル内の変数間について検討を行うこととする。

\* 島根大学学術研究院教育学系

\*\* 福岡教育大学保健体育ユニット

## 2. 方法

分析対象者は、調査協力への同意が得られており、データに欠損がない福岡県下の小学生180名と中学生138名であった。内訳として、小学生は4年生57名（男子25名、女子32名）、5年生66名（男子30名、女子36名）、6年生57名（男子32名、女子25名）であり、中学生は1年生44名（男子23名、女子21名）、2年生56名（男子27名、女子29名）、3年生38名（男子17名、女子21名）であった。調査は2010年10月から11月にかけて行われた。

### 2.1. 手続き

調査の趣旨及び調査内容について、学校長に説明を行い、調査協力の得られた学校を対象とした。調査票は各クラスで配布され、その場で回収を行った。調査票には、調査内容が成績に影響することがないこと、個人を把握できないように処理することが明記された。調査は無記名形式で実施され、質問項目への回答をもって調査への協力を同意したものとした。

### 2.2. 調査内容

#### 自尊感情

桜井<sup>9)</sup>が邦訳したRosenberg<sup>10)</sup>の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、自分に対してこれでよい (good enough) と感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。10項目からなり、回答は「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で求めた。計10項目の合計点を自尊感情得点とし、得点が高いほど自尊感情が高いことを意味する。

#### 社会的責任目標

社会的責任目標尺度は中谷<sup>5,8)</sup>が作成した18項目を用いた。この尺度は、向社会的目標と規範遵守目標の2つの下位尺度から構成されている。向社会的目標とは、社会的、対人的な協力や援助を目標とするものである。また、規範遵守目標とは、教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り、規範に従うことを目標とするものである。尺度の項目数は、向社会的目標が10項目、規範遵守目標が8項目であった。回答方法は、「いつもあてはまる」から「どんなときにもあてはまらない」までの5段階の

評定で求めた。各下位尺度の合計得点を算出し、得点が高いほど各社会的責任目標が高いことを意味する。

#### 学習意欲

学習意欲尺度は4件法による山下<sup>11)</sup>が作成した40項目を用いた。この尺度は、自主的学習態度、達成志向、責任感、従順性、自己評価、失敗回避傾向、持続性の欠如、学習価値観の欠如の8つの下位尺度から構成される尺度である。このうち、自主的学習態度、達成志向、責任感、従順性、自己評価は促進傾向にまとめられ、得点が高いほど望ましい態度であることを意味する。失敗回避傾向、持続性の欠如、学習価値観の欠如は、抑制傾向に分類され、得点が高いほど望ましくない態度であることを示す。回答は「まったくあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。分析には、促進傾向と抑制傾向の得点を算出した。

### 2.3. 分析

分析には、変数間の関係を検討するために相関分析を行った。また、仮説モデルの妥当性を検討するために共分散構造分析を行った。共分散構造分析における適合度指標は、GFI (Goodness of Fit Index) とCFI (Comparative Fit Index) は90以上とし、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) は1.0未満とした。これらの分析における有意水準は5%とした。分析には、SPSS (Ver.25) とAmos (ver.25) を使用した。

## 3. 結果

表1に記述統計および変数間の相関係数を示す。次に、仮説モデルを検討するために共分散構造分析を行った結果、適合度指標は (CFI=1.00, GFI=1.00, RMSEA=.000) であり、全て基準を満たす値が得られた (図1)。次に、変数間の関係を確認したところ、規範遵守 ( $\beta = .50, p < .05$ ) と向社会的責任目標 ( $\beta = .25, p < .05$ ) は促進傾向 ( $R^2 = .42$ ) に正の影響を及ぼしていた。規範遵守は、抑制傾向 ( $R^2 = .06$ ) に負の影響 ( $\beta = -.28, p < .05$ ) を及ぼすことが示された。促進傾向 ( $\beta = .23, p < .05$ ) と抑制傾向 ( $\beta = -.22, p < .05$ ) は自尊感情 ( $R^2 = .12$ ) に影響を及ぼすことが確かめられた。

表1 記述統計および相関係数

	M	SD	向社会的目標	促進傾向	抑制傾向	自尊感情
規範遵守目標	38.4	5.8	.43*	.61*	-.23*	.18*
向社会的目標	31.6	5.0	—	.47*	0	.10
促進傾向	68.8	9.8		—	-.22*	.28*
抑制傾向	36.4	6.2			—	-.27*
自尊感情	25.3	4.2				—

\* $p < .05$

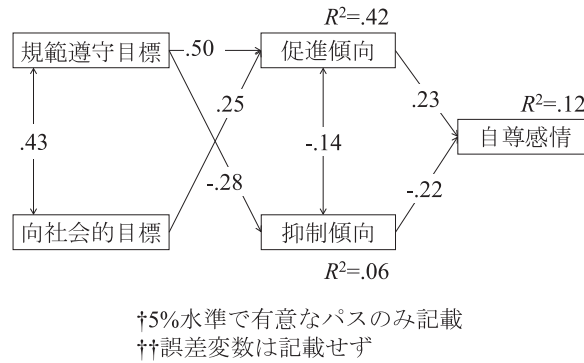


図1 仮説モデルの分析結果

4. 考察

本研究は、教室場面における社会的責任目標が学習意欲を介して、自尊感情に影響を及ぼすといった関係について仮説モデルを構築し、検討することを目的とした。その結果、仮説モデルの適合度指標は基準を満たしており、データに当てはまりの良いモデルであることが示された。また、社会的責任目標は学習意欲を介して、自尊感情に影響を及ぼすといった関係が確かめられた。このことから、教室場面における社会的責任目標に働きかけることが、学習意欲を促し、その学習意欲が自尊感情を高めるといった関係が考えられる。

規範遵守目標と向社会的目標が学習意欲の促進傾向に正の影響を及ぼしていた。中谷<sup>5)</sup>は「教室内の規範に適応的である社会的責任目標を持つ児童は、教室での中心的な課題であり、教師から、あるいは学級の規範として、積極的に取り組むことが期待されている教科学習に対しても動機づけられるようになってきている可能性」を指摘している。このことから、教室内でのルールの遵守や良好な人間関係の構築を行うといった目標を有することによって、学習に対して主体的に学習目標や学習計画を立て、目標達成に向けて努力をして、やるべき課題を自己の責任で取り組むといった望ましい態度が育まれることが考えられる。

一方で、規範遵守目標が学習意欲の抑制傾向に負の影響を及ぼしていたが、向社会的目標は抑制傾向との有意な関係は示されなかった。規範遵守目標は、教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り、規範に従うといった目標である。このように教室で守るべきルールといった目標は、望ましい態度だけでなく、学習に対して勉強を継続的に行うことができず、学習場面からの逃避や、学習に対する必要性や価値を認めないといった望ましくない態度である学習意欲を抑制することが考えられる。向社会的目標は、社会的、対人的な協力や援助を目標とするものである。このように良好な対人関係の構築に関する目標は、クラスメイトと協力して学習に取り組むため学習意欲を高めるが、学習への回避といった学習への望ましくない態度とは関係しないことが考えられる。このことから、規範遵守目標と向社会的目標は向社会的責任目標を構成する下位尺度であるが、それらが有

する目標が違うため、学習意欲に果たす機能が異なることが考えられる。

学習意欲の促進傾向は自尊感情に正の影響を及ぼし、抑制傾向は、自尊感情に負の影響を及ぼすことが示された。これは、望ましい態度で学習に取り組むことで、学習領域に対する自己評価を高めることで、自尊感情が促されることが考えられる。一方で、望ましくない態度で学習に取り組むことで、学習領域に対する自己を低く評価してしまうため、自尊感情が低下してしまうことが推察される。このことから、望ましい態度である学習意欲は自尊感情を促し、望ましくない態度である学習意欲は自尊感情を低下させてしまうことが示唆される。

本研究結果の教育現場への示唆

本研究は社会的責任目標が、学習意欲と自尊感情が向上する可能性を示唆している。そのため、教員が教室場面での社会的責任目標への働きかけが重要になる。しかし、本研究で示された結果は、社会的責任目標を高めると、必ず学習意欲と自尊感情が向上することを意味するものではない。中谷<sup>5)</sup>は、社会的責任目標と教科学習への関心・意欲に関する過程について、社会的責任行動と教師からの受容が媒介することを明らかにしている。つまり、子どもの社会的責任目標だけに働きかけるのではなく、その社会的責任目標と関係する行動に対する支援と、教師の子どもに対する受容が行われることが重要となる。

本研究の限界

本研究は、仮説モデルを設定し、その仮説モデルを支持する結果を示した。しかし、本研究は、データに対して仮説モデルが当てはまりの良いモデルの一つであることを示したにすぎない。そのため、本研究で設定していないモデルの存在が否定されるものではない。今後は、本研究で検討していないモデルの存在を考慮して、教室場面における子どもの学習意欲と自尊感情との関係について検討を行う必要がある。

また、本研究では、社会的責任目標が学習意欲を介して、自尊感情に影響を及ぼすという関係を示したが、この結果からこれらの関係に因果関係があることを示すも

のではない。なぜなら、本研究は、横断研究に基づくものであり、適合度指標が基準を満たす値が得られたからといって、その結果から因果関係の存在を示すことができないためである。今後は、本研究で示された仮説モデルに基づき、縦断研究や介入研究を行い、このモデルの妥当性について検討を進めていく必要がある。

## 5. 引用文献

- 1) 伊藤忠弘 (1994) 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討. 東京大学教育学部紀要, 34, 207-215.
- 2) 遠藤辰雄 (1992) セルフ・エスティーム研究の視座. 遠藤辰雄ほか編. セルフ・エスティームの心理学－自己価値の探求－. ナカニシヤ出版, pp.8-25.
- 3) Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976) Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.
- 4) 中谷素之 (2001) 社会的動機づけの発達と学業達成過程－社会的責任目標研究に関するレビュー－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 48, 217-232.
- 5) 中谷素之 (1996) 児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス. *教育心理学研究*, 44, 389-399.
- 6) Wentzel, K. R. (1991) Social competence at school: Relation between social responsibility and academic achievement. *Review of Educational Research*, 61, 1-24.
- 7) Wentzel, K. R. (1993) Motivation and achievement in early adolescence: The role of multiple classroom goals. *Journal of Early Adolescence*, 13, 4-20.
- 8) 中谷素之 (1998) 教室における児童の社会的責任目標と学習行動, 学業達成の関連. *教育心理学研究*, 46, 291-299.
- 9) 桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65-71.
- 10) Rosenberg, M. (1965) *Society and adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 11) 下山 剛・林 幸範・今林俊一・黒木真由子・塚田洋二・宮本光博・曾我部和弘・大塚敬吾・前原辰信 (1983) 学習意欲の構造に関する研究 (2)－学習意欲の類型化の検討－. *東京学芸大学紀要1部門*, 34, 139-152.